

## 我が国ノーベル賞受賞の栄枯盛衰

荒野 詰也

今年もノーベル賞の季節がやってきた。

今年九月に、英調査会社クラリベートによるノーベル賞登竜門として自然科学部門二十人の「引用栄誉賞」の受賞があり、日本人の三人が対象となった。それで今年は、少なくとも一人ぐらいはと期待していたが及ばなかった。

過去の日本人受賞者は、自然科学部門で合計二十三人、部門別は、医学生理部門六人、物理学部門九人、化学部門八人となっている。

時期的には、湯川博士の第一号から約六十年間で十二人であったが、二〇一〇年以降は多くなった。年別では、二〇一〇年二人、二〇二二年一人、二〇一四年二人、二〇一五年二人、二〇一六年一人、二〇一八年一人、二〇一九年一人、二〇二二年一人の計十一人である。

ノーベル賞は、その研究開発成果と受賞までの期間は、二十〜三十年はかかるとすると、対象の発明発見の時期は、我が国の高度成長期が多いと推定される。このように、我が国のその後の失われた三十年にあたる現在は、必然的にノーベル賞受賞は出難くなっている。

これを裏付けるものとして、各国の研究投資は、二〇〇〇年比で、米国は現在二・七倍、中国は二四・五倍、韓国は五・三倍に対し、我が国は〇・九倍とむしろ減少している。また、ノーベル賞受賞の目安となっている重要引用論文数の順位が二十年前は、米国・中国・英国・独国について我が国は五番目だった。しかしこの順位が下がり続け、三年前に十位となり今年はベストテンから外れ十二位となっている。

この低下要因は、大学等の研究機関への投資削減と、研究活動で選定対象となるテーマが短期的に成果を求められるようなものが多く、じっくり取り組めるような環境でなくなってきた。

この現状に対して、今回公的研究投資が数百億円積み増しされた事と、現場の研究活動に対して、金・物・場所の支援を行う組織が設立され、具体的活動が開始されている。そして、長期的には、大学の博士課程の質的量的拡充への支援が不可欠である。